

はり ま たん げん 播 磨 探 検

2021. 9. 22 312号

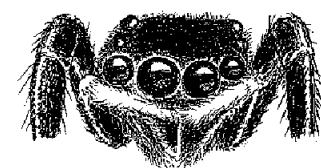
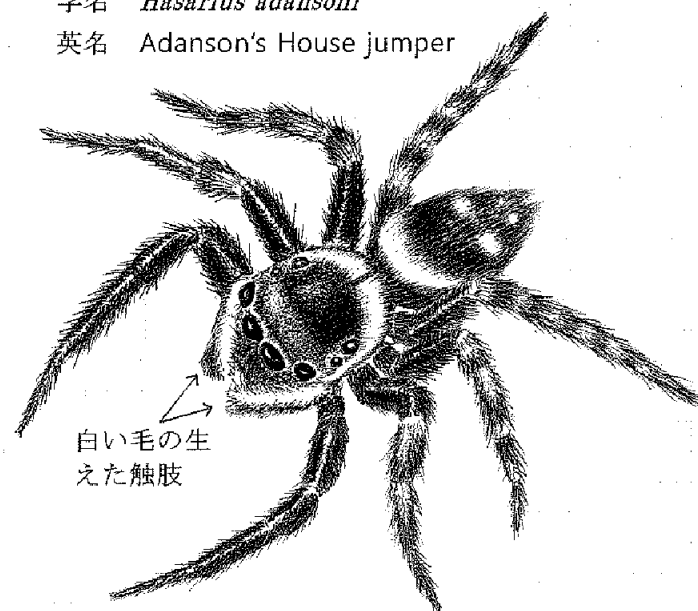
え・文 赤松弘一

アダンソンハエトリ

(ハエトリグモ科) オス 体長6mm

学名 *Hasarius adansoni*

英名 Adanson's House jumper



頭部には大小8個の眼が並ぶ、どのように風景が見えているのだろうか？

クモは非常に身近な生き物だが、あまり好かれない。よく似たカニに対する態度と比べるとアカラサマである。例えば年末に大きなゆで松葉ガニが食卓にあると誰もが笑顔になる。そして甲羅をあけてミソがたっぷり詰まっていると「おおっ、こいつは当たり！」と手を打って喜ぶ。結構不気味な姿で、そんなエイリアンみたいなものの内臓を食うのか！と思うが、みんな(私も)大好きである。クモの場合はどうだろう、年末の食卓に巨大なゆでグモが載っていたとして、笑顔になるだろうか、その腹を切り開いて「おお、こいつは当たり！」とはならない気がする。

さて、ここ2か月ほど前から我が家ではテーブル上やカーテン上、時にはトイレの壁面などを体長5mmほどの黒いクモが徘徊している。

大きなアシダカグモが出ると「わわわ」とパニックになるが、我が家の小さなクモは愛嬌があり、なかなかかわいい。調べるとアダンソンハエトリというクモであると分かった。

やたら賢そうな名前だが、この名前のアダンソンは、19世紀のフランスの博物学者の名前らしい。絶対にアンダーソンと間違えて覚えている人がいると思う。アダンソンハエトリは初夏に生まれて冬を越し、翌春に産卵するというから1年の寿命か。日本の固有種ではなく、世界中の暖かい地域に生息しているらしい。特徴は腹部の背面に三日月型の白い模様がある他、顔の前にある触肢という白い毛が密生した腕のようなものが目立つ。オスはこれを「こっちゃ来い、はよ来い」という感じに左右そろえて上下に振るのである。この行動はシオマネキというカニがハサミ脚で行うダンスに似ている。私はトイレが済んでも、ついついオスグモのこのパフォーマンスに見入ってしまい、なかなか立ち上がれない。一方メスのアダンソンは茶褐色で目立たない(らしい)。

ハエトリグモなどの徘徊性のクモは巣をつくらない。(ただし、高所からの移動やジャンプの時などは命綱として糸を出す。やはり賢い)室内の小バエなどを敏捷に捕獲して食べるという非常にありがたいクモである。ハンターとして獲物を捕獲するために眼がよく発達している。眼は8つあるが、クモには周りの風景がどのように見えるのだろうか。

【追記：9月10日夜、窓ガラスにメスのアダンソンらしい茶褐色の小さなクモを見つけ、オスと共に容器に入れて恋の行方を観察した。さらにもう1匹メスを見つけて容器に入ると、オスが飛び掛って食いついた！恋は成就しないようなので、初めの雄雌2匹を逃がした。一方、別室で雄雌のカップルが小さな糸のトンネルに同居しているのを発見した】

光合成をしないけれど……植物です

9月20日、加東市のやしろの森公園を訪れた。台風14号が去った後、涼しくなったと思ったが、日中はまだまだ蒸し暑い。ツクツクボウシ、ミンミンゼミの合唱もまだ盛んだ。公園事務所近くのススキの株の下を探ると、ナンバンギセルの群生が見つかった。この場所に毎年出てくる寄生植物である。

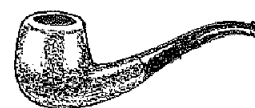
ナンバンギセルには葉がない。ごく短い茎から長い花茎が伸びて、筒状の赤紫色の花をつける。花茎や萼(がく)片は白っぽい、それは葉緑素を持たないからである。したがって光合成を行わない。ナンバンギセルは短い根をススキの根に這わせて、そこから栄養分を吸収して生きるのである。ススキやサトウキビなどのイネ科の植物の他ミョウガやショウガなどにも寄生するらしい。

葉緑体を持たない寄生植物は、黄色い絡んだ糸のようなアメリカネナシカズラが加古川河川敷でよく見つかる。また5月ごろには、シロツメクサに寄生するヤセウツボというシソの花序のような黄土色の花茎がたくさん立ち上がる。どちらも葉がない。

他に、透き通るような白い色をしたギョリンソウという植物がある。これも葉緑素を持たず、腐植土の中の菌類から栄養分を吸収して生きている。

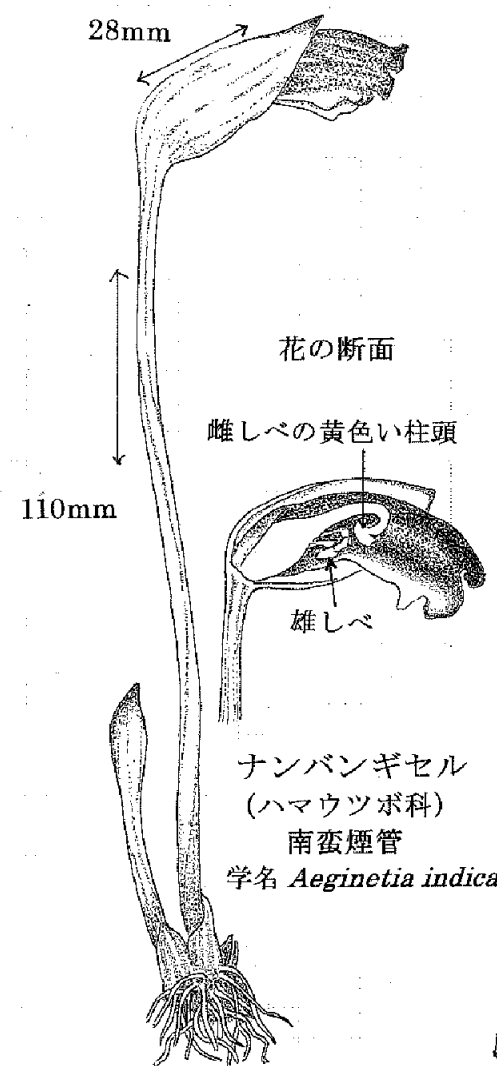
ナンバンギセルは秋に、ギョリンソウは春に花を咲かせて、マルハナバチなどに花粉を運ばせて受粉し、種子を作る。葉緑体を持たないという点以外は普通の植物と同じである。ナンバンギセルの種子は非常に小さく粉状である。種子に栄養がなくても、宿主の根に付着すれば、その栄養で生きていけるのだ。微小な種子を多量に作り、生き残りを図る。

万葉集に出てくる「尾花(ススキ)が下の思ひ草」というのは、ナンバンギセルのことだといわれる。この花がススキの下で思い悩むよう俯いて咲くことから、思ひ草と名付けたのだ。やんごとなき方々は雅なことだが、私にはナンバンギセルの長い花茎や、その先の赤紫の花は、湖に群れているフラミンゴの首に見える。20年ほど前、朝霧中学校の学校のフェンス沿いのススキの株にナンバンギセルが出ていたが、今も



南蛮煙管(マドロスパイプ)

出るのだろうか。



ススキの根元に群生する